

かまって「ひろちゃん」のセラピーロボットとしての活用資料

ヴイストン株式会社

1) 製品概要

かまって「ひろちゃん」は、赤ちゃんを模したぬいぐるみ形状の、まったく新しいヒーリングコミュニケーションデバイスです。かまって「ひろちゃん」は、使用される方が「あやす」ことで機嫌がよくなり笑い出しますが、放っておかれると機嫌が悪くなり、最終的には泣き出してしまいます。

使用の流れとして、「赤ちゃんを泣き止ませる」という行為が、即時に「赤ちゃんの笑い声」という結果として得られる特徴があり、報酬系を効果的に刺激するという製品意図をもって開発を行いました。同時に、「赤ちゃんの笑い声」が、人間にとっての根源的な喜びに通じるという狙いに基づいており、そのために実際の赤ちゃんからサンプリングした、非常にリアルな（=かわいい）声を使用していることも大きな特徴です。

かまって「ひろちゃん」の製品取り扱い方法については、製品の取扱説明書(https://www.hiro-chan.jp/download/hiro_manual.pdf)もご参照ください。

本資料では、介護施設等において、かまって「ひろちゃん」をセラピーロボットとして使う場面（以下、本活用方法と記載）について、使用方法や望ましい活用シーンの提案を行います。

2) 使用シーン（前提条件と活用目的）

本活用方法での最も重要な前提条件は、かまって「ひろちゃん」（以下、本製品と記載）を「介護者の負担低減のツールとして使う」ことにあります。

その目的のため、本活用方法においては、施設等での介護者が主体となって本製品を運用することを想定しています。すなわち、介護者が適切と判断した場面において、被介護者に本製品をご使用いただく形であり、被介護者に預けっぱなしとなることは、後述の理由から推奨されません。

そのため、本活用方法においては

- ・ 介護者の負担軽減に役立っているか
- ・ 被介護者の満足を得られているか

という点で運用や評価を考えていただきたく思います。

2-1) 活用におけるシチュエーション設定とゴールイメージ

本活用方法においては、介護者が被介護者に、「赤ちゃん（＝本製品）のお世話を頼む」というシチュエーション設定を想定しています。

被介護者は、介護者からの依頼（赤ちゃんのお世話）を行うことで一定時間の集中があり、その間に介護者は短時間の別の用事を済ませることができます。同時に、被介護者には「介護者から要請されたタスクを解決した」という充足感が得られ、人間関係における社会参加の実感を得られることを目指しています。

すなわち、

- ・ 介護者

- 本製品の「お世話」を被介護者に「依頼する」
 - その間にわずかな時間が生まれるので、別の用事を済ませられ、介護負担軽減に繋がる

- ・ 被介護者

- 本製品の「お世話」を介護者に「依頼される」
 - 依頼に基づいて本製品をあやし、その後に介護者に本製品を返却する
 - これにより、介護者から依頼された内容を遂行するという社会参加が実現できる

というサイクルを生み出すことをゴールイメージとしています。

2-2) 好適な使用条件

本活用方法においては、以下のような条件で使用されることが望ましいと考えられます。詳細については、別紙添付のアセスメントも活用してください。

- ・ 被介護者

- 赤ちゃん好き、世話好きである方
 - 子育て経験のある、特に女性
 - 認知症の日常生活自立度が II あるいはそれ以下であること

- ・ 本製品を介護者から被介護者に預ける時間が、3分～5分程度であること

2-3) 望ましくない使用条件

本活用方法において、以下のような条件の場合には、期待した結果が得られない場合があります。

- ・ 被介護者が赤ちゃんを快く思わない場合
ご自身の過去の経験から、赤ちゃんに良くない思い出やネガティブイメージがある場合、本活用方法に適さない場合があります。
- ・ 被介護者が男性である場合
弊社での様々なテストの結果、一般的に男性は赤ちゃんの扱いが得意でない方が多いようです。
- ・ 本製品を、長時間にわたって被介護者に預ける状況
赤ちゃんがうまく泣き止まない場合に、被介護者が非常に慌ててしまう場合があります。また、本製品の動作は非常にシンプルなので、使用される被介護者によってはすぐに飽きてしまい、以降の本製品のご使用に抵抗を示されるようになるケースがあります。
(なお、使用される方によっては極端に本製品を気に入られる例があり、こういった例においては、本項目の限りではないと考えられます)
- ・ 本製品が仮に泣き止まなかった時に、被介護者が責められるような状況
本活用方法においては、被介護者が社会的参加をしている実感を得られることも目的としており、仮に本製品が泣き出したままの結果となっても、介護者がそれをうまくフォローしていただく必要があると考えられます。
仮に、被介護者が「本製品をうまく泣き止ませなかったら怒られる」といった認識をしてしまうと、以降の本製品の活用が困難となる可能性があります。

3) 想定される活用場面

本活用方法の具体的な場面については、それぞれの環境によって異なるものの、以下のようものが想定されます。

- ・ レクリエーションの途中、機材準備などの空き時間など
- ・ 食事の配膳準備中など

なお、本製品を被介護者に預けた直後などに、介護者から簡単な使い方説明を毎回行うことが望ましいと考えています。「この子をよしよししてあげてね」「たかいたかいしてあげてね」など、被介護者の身体能力に応じ、実現可能な範囲で、本製品に振動を与えるようにインストラクションを行ってください。

なお、本製品では、内部のセンサーで振動を検知して動作しているため、「どんなにあやしても泣き止まない」というケースも生じます。特に、筋力があまり強くない方の場合、センサーで検出できない程度にしか動かせないケースもあります。

その場合、放っておくと本製品は泣き出してしまうので、こういった事態が生じた場合には、介護者の方がうまく介入をするように心がけてください。

4) 今後の改良に向けてのお願い

本資料は、本製品を開発および活用してきた中で得られたノウハウに基づき作成していますが、本製品の活用場面はこの内容にとどまるものではないと考えています。そのため、本資料の内容をよくご理解いただいたうえで、かつ、本資料の内容にとらわれることなく、介護者、被介護者の両方にとって良い結果となるようにご活用いただければと思います。

弊社においても、本資料の改善、あるいは本製品のさらなる改良を行いたく、活用事例や好適な事例などについて、また、本資料に関するご指摘、ご指南について、弊社宛てに幅広いご意見をぜひお寄せいただきたく考えております。